

2012年6月16日、第24回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。会場は専修大学・神田キャンパスとなります。プログラムは別紙の通りです。ご出欠のハガキを同封しましたので、5月中の投函をお願いいたします。今回の Newsletter には、研究発表要旨、シンポジウム(×2)の梗概を掲載しました。

6月2日には、日本ジェイムズ・ジョイス協会主催で、京都ノートルダム女子大学にて、デレク・アトリッジ氏の講演が行なわれます(プログラム別紙)。こぞって御参加ください。

Topics

- 第24回研究大会
 - ～研究発表要旨、シンポジウム梗概～
 - ～アイルランド大使公邸の reception について～
- Derek Attridge 氏の講演会について
- 事務局より
- (別紙) 大会プログラム / 講演会プログラム

第24回研究大会 研究発表要旨、シンポジウム梗概

1. 研究発表 (発表順)

(1) ジョイスと聖キャサリン教会

—— 「姉妹」の舞台設定に見るジョイスの思惑 ——

金田 法子

『ダブリン市民』の短編「姉妹」の中で、ジョイスは中風に犯されたフリン神父と、自身と神父の関係について語る少年を主な登場人物とした。神父はダブリンのスラム、アイリッシュタウンの出身である。彼は取り分けて優秀であり、姉妹の献身的な援助を受け、やがてローマに在るアイルランド神学校で学び始める。この学校の出身者にはアイルランドの教会組織で司教や大司教といった要職に就く人物が多く見られ、一見、神父の華々しい出世コースも約束されているかのように見えた。しかし、彼の夢はあえなく頓挫し、神父は極貧の人々の住むダブリン市ミース通りの聖キャサリン教会の司祭の地位に甘んじるようになる。しかし、そうした状況にあっても、神父は忠実に日々の業務をこなしていく。他方、神父には「どこか奇妙で不気味だ」といった噂が広まって

いく。そんなある日、侍者が聖杯を落としたことに衝撃を受けた神父はついに精神に病を来たし、一人、告解室の中で薄笑いをしている姿を発見されるといったストーリーである。

ジョイスが、その作品の舞台設定について徹底した情報収集をし、調査を行っていたことは弟スタニスロースに宛てた書状や伝記からも明らかである。聖キャサリン教会は、現在も変わることなくダブリンの下町、ミース通りにたたずんでいるが、私は、なぜジョイスがダブリンに数多ある教会の中でこの聖キャサリン教会を物語の舞台として選択したのかに疑問を抱いた。このため、その理由を求め、現在の聖キャサリン教会の主任司祭グード神父と面談し、教会の内部構造を確認し、その歴史などを尋ねた。

そうした情報を元に、今回、当時の教会周辺の街や人々の様子、他の教会と比した聖キャサリン教会の構造的特徴などの調査を行った。

発表では写真なども交え、ジョイスの奇妙な選択の真相に迫りたい。

(2) 『ユリシーズ』の中のイエイツ

道木 一弘

『ユリシーズ』の作品世界に、W. B. イェイツが登場することはない。1904年当時、イェイツはアイルランド国民演劇協会のロンドン公演とアベイ座設立準備のために奔走していた。彼のロンドンの住居から編集者に宛てた6月16日付けの手紙が残っている。従って、言葉と語りにおいて多様な実験を試みながらも、リアリズムの枠組を維持する『ユリシーズ』にイェイツが出て来ないのは当然かもしれない。

だが、イェイツはこの作品に少なからぬ「気配」を感じさせる。周知のように、第一挿話前半でステイーヴンが引用する詩句はイェイツの戯曲 *The Countess Cathleen* (1899) から取られたものであり、また彼が遭遇するミルク売りの老婆は同じくイェイツの戯曲 *Cathleen ni Houlihan* (1902) と係わっている。しかも、同名の女性をタイトルに含むこの二つの戯曲は興味深い歴史的背景も共有している。初演時において、イェイツがキャサリン役にモード・ゴーンを想定したこと、それぞれの初演の年にボーア戦争が始まり終わったこと、ゴーンはボーア戦争に一貫して強く反対したこと、そしてジョイス自身は前者を絶賛し、後者に失望したことである。

本発表ではジョイスとイェイツの係わりを再考しながら、その関係性が『ユリシーズ』の三人の主人公を生み出すダイナミズム、およびイェイツの「気配」の意味を探ってみたい。

(3) ブルームはなぜパントマイムソングを書かなかったのか

——背景にある政治と劇場事情——

小田井 勝彦

『ユリシーズ』第17挿話の問答のひとつで、ブルームはクリスマスパントマイム *Sindbad the Sailor* の中に入れられるトピカルソング *If Brian Boru could but come back and see old Dublin now* の作詞を依頼されたことが明らかとなる。ブルームの唯一の文芸的成功とされる部分である。

結局、ブルームは、その歌の作詞ができなかったわけであり、6つの理由が提示されている。しかしながら、そのパントマイムの上演(1893年)と解答に挙げられている各事項の間には4~5年の隔りがあり、完全なアナクロニズムを思わせる項目もある。また、ヴィクトリア女王の60年祭と魚市場の開場、現実のヨーク公爵夫妻と架空のブライアン・ボルーといったあまりにもかけ離れた二項対立によって、読者は惑わされる。あげくの果てには、ブルームが歌手の下着に色欲を覚え、ジョーク本から適当なものを見つけることができず、政治家たちの名前で脚韻が作れない、という粗末な理由が挙げられており、読者は笑いに誘われ、呆れ果ててしまうのではないだろうか。第17挿話の「信頼できない語り手」の典型的な例であると一蹴してしまうこともできる。本当にブルームが作詞の依頼を受けたのかさえ疑わしいように思えてしまうであろう。

しかしながら、当時のアイルランドは自治法案をめぐり、過熱した政治状況下にあった。王室のアイルランド訪問により、帝国の一部であることを印象付けたいユニオニスト側と、それを阻みたいナショナリスト側の攻防があった。また、パントマイムやミュージックホールは、作品自体はアイルランド独自のものであっても、根本的にはイギリスからの輸入物であり、イギリス帝国主義のプロパガンダの役割を果たしていたものでもある。

さらには、理由の3番目にも挙げられているが、ダブリンでの新しい劇場の建設により、競争が激化し、観客を獲得するために観客の好みに合わせ、過剰な演出を強いられていた。しかし、肌の露出を伴う過剰な演出は、検閲を受ける恐れがある。

ブルームは、それらの政治状況や社会状況に戸惑い、パントマイムソングを創作できなかったのである。この発表では、語り手による6つの理由にはっきりと示されていない社会背景を考察したいと考えている。

(4) ホメーロスに関する *The Book of Tea* 『茶の本』(1906)と『ユリシーズ』の間テキスト研究

東郷 登志子

The Book of Tea は近代日本美術の先駆者天心こと岡倉覚三(1863-1913)がニューヨークで出版した英文の日本文化論である。精選された言葉にシェイクスピアに範をとった比喩を駆使して、東西古今の文学や聖典を織り込み、画期的な文体によって日本文化の多層性と混交性を表象した形式・内容両面における破格な詩的散文の芸術論でもある。

本発表は同書にホメーロスの *The Odyssey* 『オデュセイア』が内在している事実を指摘し、同書の文学的手法が、ジョイスの *Ulysses* 創作の動機に関係していると推測する根拠の一つとすることが目的である。

岡倉は日本の茶道文化を論じる過程で特殊な記号(signe)に記号内容(signifié)として *The Odyssey* のキー・ワードを散らして、ギリシア古典のモチーフを作っていた。その事実を検証するために *The Book of Tea* と *The Odyssey* に共通する要素を抽出し、それと並行させてジョイスの *Ulysses* を比較する。はじめに、*The Book of Tea* を構成する7つの章に関する数字の比喩を示し、次に岡倉の手法を3つカテゴリーに分類して考察する。

1. *The Odyssey* を暗示する特殊な語彙

(1) テーマ (2) オデュセウスが訪れた場所 (3) 主要登場人物の性格等

2. *The Odyssey* のエピソードに類似する日本のエピソード

3. *The Odyssey*のエピソードを暗示する *The Book of Tea*の文体変化

これら 3 つのカテゴリーは、概念と手法において *Ulysses* との類似を想わせる。加えて、文体実験と潜在的テーマも *The Book of Tea* と *Ulysses* に共通する。比較検証の結果、岡倉が、ルネッサンスの思潮を反映させたシェイクスピアの比喩的手法を模して、同書にホメーロスの *The Odyssey* を埋め込んでいた事実が明らかとなった。その結果、こうした巧みな比喩を駆使した岡倉の技法に気付いたジョイスが、概念と構成において *The Book of Tea* を手本として、新たな小説を書く試みを決意させた可能性が浮上してくる。

2. シンポジウム (1)

ジョイスと音楽

司会兼講師 清水 重夫
講師 横内 一雄
講師 大島 由紀夫
講師 宮田 恭子

ジョイスはダブリンの学生時代に FeisCeoil に出場して、第2位になったように、音楽についての興味は並々のものではなかった。将来作家にならなければ、声楽家として世に出る可能性があったと言われていた。その後ヨーロッパ大陸に移って、トリエステ、チューリッヒ、パリでの生活が続いていくが、その生活には音楽が欠かせないものであった。子供たちも音楽との関わりを深く持っており、長男のジョルジオは歌手に、長女のルチアは舞踊を通じて音楽と近いところにいた。

パリでの生活では、アイルランドのテノール歌手、ジョン・サリヴァンと知り合い、その熱狂ぶりはエルマンの伝記に詳しい。オペラはよく観ていて、ヴェルディの『ラ・トラヴィアータ』、『ウイリアム・テル』、ワグナーの『マイスタージンガー』その他への言及が数多くある。

作品に目を転じてみると、*Dubliners* では“A Painful Case”, “The Dead”など音楽をテーマとしたものが多い。また *Finnegans Wake* は題名の通りの歌だけでなく、音楽への様々の言及で溢れている。そして何よりも音楽をテーマとした *Ulysses* の第 11 挿話がある。ジョイスは最初に序曲の部分を置き、オーモンドホテルの場面では“The Croppy Boy”, “Marha”などがアリアとして歌われるところなどオペラ好きの彼らしく、いろいろの工夫をしている。

本シンポジウムでは、話のきっかけとして、ジョイスの作品の中から *Ulysses* 第 11 挿話を取り上げ、その分析を行なう。そして続いてリヒアルト・シュトラウス、ドビュッシー、ワグナーの作品との関係を明らかにして、ジョイスの音楽への傾倒の様を明らかにできればと考えている。(清水 重夫)

「風と海の対話」——ジョイスとドビュッシー

横内 一雄

『ユリシーズ』第3挿話の後半で、浜辺の岩上に横たわったスティーヴンは、重くなってきた睫毛越しに、南に差しかかる太陽を見る——「パンの時間、牧神の正午」(3.442-43)。たしかにここでのスティーヴンは、マラルメの「牧神の午後」の話者を模倣している。が、そこにドビュッシーの音楽も重ね聴くことはできないだろうか。現代音楽の祖となった「牧神の午後への前奏曲」は1894年に初演され、1912年には有名なニジンスキーの振り付けで実演された。それに先立ち1902-3年には、初めてパリを訪れたジョイスが初演間もない『ペレアスとメリザンド』を鑑賞している。ジョイスは『肖像』でも、スティーヴンにドビュッシーを髭髯させる半音階旋律を心の中で聴かせている。ジョイスとクラシック音楽の関係では、オペラ——それもジョイスの好んだイタリア・オペラ——に注目が集まりがちだが、ジョイスは当時の前衛音楽の旗手の何人かと交友を結び、しばしば彼らの作品を鑑賞した。ジョイスがこれらの作品にどれだけ理解を示したかはまだ詳らかにされていないが、それを探る第一歩としてジョイスのドビュッシー体験に着目し、とりわけドビュッシーの交響的素描『海』を手がかりにジョイスの「プロテウス」挿話を読み直してみたい。

ワーグナーとジョイス

大島 由紀夫

生涯を通してワーグナーの作品に接していたジョイスは、ワーグナーの使った音楽技法・劇技法を『ユリシーズ』における小説技法に応用している。具体的には、ワーグナーの無限旋律が第18挿話のモリーの意識の流れに、神話的楽劇構造が『ユリシーズ』全体の小説構造に、ライトモチーフが、各所に見られる特定の人物・場所・事柄に対する一定の形容文句や叙述表現に、半音階和音が第11挿話で使われている特異な合成語などに応用されている。しかしよく言及されるこうした顕著な影響関係の他にも、微妙な影響関係を窺わせるところがある。例えば、『ニーベルングの指輪』の序夜『ラインの黄金』の冒頭で持続する和音が、『ニーベルングの指輪』全体の象徴になっていることと、『若き日の芸術家の肖像』の冒頭の数ページが、この作品全体に描かれている主人公の成長過程の内容の象徴になっていることの間、影響関係が窺われる。また、『ラインの黄金』を除く『ニーベルングの指輪』3作品の各場面が、原則一人物対一人物の対話になっていることは、『ユリシーズ』第17挿話の教義問答、並びに『フィネガンズ・ウェイク』の所々に見られる語り手と読み手との掛け合い構造に影響しているように思われる。

オペラ『サロメ』とジョイス

宮田 恭子

一九〇九年三月、トリエステでシュトラウスの『サロメ』が上演された。ジョイスはこれに先だってワイルド論を書き、地元の新聞に寄せた。オペラ自体について彼は何も書き残していない。しかしこの前衛的なオペラはジョイスを解く鍵の一つとなる。

ジョイスの娘ルチアは舞踊を学び、劇場での発表会にも参加した。使われる音楽は、当時パリを席卷したバレエ・リュスと同じ、ドビュッシーやラヴェル、スクリャビン、ストラヴィンスキーらの曲

であった。友人・知人の証言によれば、ジョイスは同時代の作曲家を好まなかった。しかし娘が踊る音楽は受け入れざるをえなかっただろう。それを受け入れる素地は、器楽曲よりも歌を好んだ彼の愛するオペラという分野の最初期の前衛作品、『サロメ』によって用意されたのではないか。

『フィネガンズ・ウェイク』には『サロメ』を暗示する語やフレーズが認められる。ジョイスはワイルドの原作を念頭に置いていたかもしれないが、彼の意識の奥にこのオペラがあったと思わせる例は語句以外にもある。例えば、オペラ『サロメ』の「七つのヴェールの踊り」は、『ウェイク』の色当てごっこをする少女たちの踊りを連想させる。ルチアたちの踊りについて言えば、これも「七つのヴェールの踊り」に似て、古典バレエの文法から解放された、自由な身体表現を基本とするものであった。

3. シンポジウム (2)

第 14 挿話から『ユリシーズ』を読む

司会兼講師 須川 いずみ
講師 浅井 学
講師 下楠 昌哉
講師 中尾 真理

関西のジョイス読書会では、2巡目の『ユリシーズ』第 14 挿話を読み終えて第 15 挿話に入ったところである。1巡するのに時間がかかりすぎるせいで、これは問題だと騒いでは前回も同じことを問題にしていたことに後から気づくという有様である。学習が忘却に追いつけない気がしないでもない。ただ、14 挿話は今も読むのに大変苦勞するところではあるが、回を重ねるごとに段々とその面白みを感じるようになったことも事実である。そこで今回は、その難解な字面から少し距離をとって、それぞれが 14 挿話を基軸に『ユリシーズ』を読む、できればジョイス文学を考えてみたい。

中尾は、スティーブンと‘paternity’という視点で 14 挿話を読む。「出産と誕生」がテーマとなる 14 挿話だが、スティーブンとブルームの物語として読めば 7 挿話、9 挿話の流れから“Thou art all their daddies, Theodore.”と褒め称えられる偉大なる父親の存在が鍵となる。この挿話ではスティーブンが異様なほど浮かれ騒ぎ、最後には“Burke's!”と叫んで一同を酒場に先導しているが、その理由はなんだろうか。華麗なテクニクに埋もれがちなスティーブンとブルームの物語を丹念に拾いあげ、『ユリシーズ』全体の中の 14 挿話の位置についても考察する。

下楠は 14 挿話のエンディングの解釈論から出発する。ジョイス自身が“it ends in a frightful jumble of pidgin English, nigger English, Cockney, Irish, Bowery slang and broken Doggerel”と呼んだ、第 14 挿話の 1440 行から最後の 1591 行の部分を読み解く。ジョイスは 14 挿話で先行する文学作品の文体の模倣を試みているわけだが、純文学だけでなく大衆演劇を強く意識した

側面も伺える。特に 14 挿話にはステージ=アイリッシュマンへのアレルギーが多く含まれ、次の第 15 挿話や『フィネガンズ・ウェイク』へのつながりが読めるので、その関係性を考える。

浅井は第 14 挿話における数々のパステーションが、英語史や英文学史通りではなく、ジョイス的歪みというかアレンジであることを意識している。それでデフォーとスウィフトの文体パロディー（14:529-650）とその周辺を中心に、第 14 挿話の中に読み取れるアイルランド（人）と英語の問題について考察する。

アイルランド大使公邸での reception について

今年の研究大会はまさしく Bloomsday にあたりますため、駐日アイルランド大使のご厚意により、同日 19:00 より大使公邸にて reception を開催して頂くこととなりました。このため、今回の大会では、日本ジェイムズ・ジョイス協会としての懇親会は行いません。大使公邸での reception へのご出欠につきましては、後日大使館より会員の皆様に送付される（予定の）招待状をご覧の上、各人でお返事して頂ければ幸いです。なお、念のため出欠ハガキでも御出欠をお知らせください。（後日大使館より事務局に確認の問い合わせが入る場合があります。）

Derek Attridge 氏の講演会について

今年の大会は専修大学・神田キャンパスにて行われますが、大会の 2 週間前にあたる 6 月 2 日（土）には、日本ジェイムズ・ジョイス協会主催、日本英文学会・関西支部後援にて、Derek Attridge 氏を京都ノートルダム女子大学にお招きし、特別講演会を開催いたします。*Cambridge Companion to James Joyce* (1990) や、*Semicolonial Joyce* (2000)、*Joyce Effects* (2000)、*Reading and Responsibility* (2011) など、精力的にジョイス論、文学論を発表されておいでです。とはいえ自分以上の世代でしたら、何より 80 年代に（Daniel Ferrer とともに）デリダの議論や post-structuralism をジョイス批評に接合したことで記憶されているのではないかと思います。*Peculiar Language* (1988) も刺激的でした。

ご存知の通り、5 月の日本英文学会（専修大学・生田キャンパス）でもアトリッジ氏の講演会が開かれますが、御本人からは、日本のジョイシアンの方々にお話しできる機会を何より楽しみにしているとのことでした。

演題は英文学会とは異なり、とくにジョイシアン向けに、"Joyce's Wake: The Joycean Revolution and the Irish Writer" となっております。会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。（吉川 信）

事務局より

～口座振込について～

* 日本ジェイムズ・ジョイス協会の会費 5000 円 (学生会員の場合 3500 円) は、安全のため、すべて「振込」とさせて頂いております。(会場ではお受けできません。) 下記「ゆうちょ銀行」の口座へお振込みください。振込用紙は郵便局に備え付けのものを御使用ください。(ATM 機でしたら用紙なしでも可能です。)

* 通信経費節約のため、通常領収証は単独ではお送りしておりませんが、研究大会当日の受付にてお渡しできるよう用意いたします。(ただし、大会直前ですと口座の確認ができませんので、できるだけ5月中のお振込みをお願いいたします。) また研究大会・御欠席の方には、後日送付する *Joycean Japan* に同封させて頂きます。

* 領収証をお急ぎの場合、その旨、同封の出欠ハガキの備考欄にお書き添えください。事務局にてお振込みの確認が済み次第郵送いたします。

* 誠に恐れ入りますが、振込手数料は会員の皆様にご負担頂いております。

* ゆうちょ銀行へは、他銀行からの振込みが可能になりました。ただし郵便局からの振込みとは異なり、新たに設定された店名・預金種目が必要になりますので、お知らせいたします。

- 銀行名： ゆうちょ銀行
- 金融機関コード： 9900
- 店番： 048
- 預金種目： 普通
- 店名： 〇四八 店 (ゼロヨンハチ店)
- 口座番号： 0185454

* なお、今年は学会としての「懇親会」は行ないません。会費のみ御振込みください。

~~~~~

住所変更をされてこの Newsletter が転送で届いた方は、お手数ですが右記事務局宛にお知らせください。(e-mail 可)



### 日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

吉川信研究室内

メールアドレス: sean\_jjsj\_since08june (at) ybb.ne.jp

ゆうちょ銀行 口座番号: 記号 10430 番号 1854541

(名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会)